

令和三年度 滋賀県立玉川高等学校特色選抜問題

令三 小論文

注意

\* 答えは縦書きとし、全て解答用紙の決められた枠内に書き入れなさい。

\* 字数には句読点も含む。

\* 漢字は楷書、仮名遣いは現代仮名遣いで書きなさい。

\* 原稿用紙の正しい使い方にしたがって書きなさい。

受 検 番 号

次の文章を読んで後の問いに答えなさい。

人が本を読まなくなつた。あれほど堅固に見えた（紙の本）への信頼感がぐらりと揺らいだように思える。このさき私たちの読書環境はどう変わってしまうのだろうか。

こうした不安をもたらした犯人はデジタル革命だという説があります。ゲームやSNSのせいだとか、なにもかもインターネットがわるいのだから。

でも、はたしてそう簡単にいきつてしまえるのかどうか。だいいち若者の「本ばなれ」が頭著になつた七〇年代末には、デジタル革命はまだ緒にすぎたばかり。戦後はじめて本の総売上が下降に転じたのも、インターネットや携帯電話が広く定着したのも、すべて九〇年代が終わり近くなつてからのことなのです。であるからには、どう考えても読書習慣のおとろえの責任をまるごとデジタル革命に負わせることにはむりがある。それよりも、このおとろえは二十世紀後半、デジタル革命の開始以前に（紙の本）の世界の内側で徐々に醸成されてきたと考えるほうが、よほど自然なのではないだろうか。

もうひとついえば、新しく興隆したメディアが（紙の本）をほろぼすという危機の構図にしても、それ自体は新しいものではなく、すでに出版産業化が本格化した一九二〇年代にはすでに現していました。この時の本の敵は映画（無声映画）です。たとえばチェコの人気作家でジャーナリストのカレル・チャペック。かれは一九二五年に、早くも成熟期に足を踏み入れた映画の力をたたえて、これからは本を読む「概念的タイプ（老年世代）」にかわつて映画で再教育された「視覚型人間（現代の人間）」が増えていくだろう、と予言していた。

読書タイプの人間は忍耐強い。周囲の状況を認識し、事件の記録のなかに腰を据え、話を最初から最後までたどつていくだけの十分な時間を取る。

視覚的タイプはそれほど忍耐強くありません。状況を一目で把握し、時間をかけずに話の筋を飲み込んでしまいたがります。そして、次の瞬間にはもう新しい何かを物色しているのです。しかし、もしかしたら、たつぷり息を吸うために、映像の急流から逃れ、本に戻る人も出てくるかもしれません。（目の世代）

（津野 海太郎 『読書と日本人』による。）

（注） SNS……インターネット上で、人々が共通の話題や趣味を通じて交流するネットワーク型サービスのこと。

緒についた……物事が実際に始まる。

問 右の文章でカレル・チャペックが一九二五年に予言していたように、現代では「視覚型人間・視覚的タイプ」が増えていきます。そこで「視覚型人間・視覚的タイプ」が増えたことでどのような問題が起こっているか、現代の社会における具体的な例を挙げて述べなさい。また、そのような問題を解決していくために、今後あなたはどのように「読書」をしていくべきか、あなたの考えを述べなさい。ただし、字数は二百四十字以上、三百字以内とする。